
悲しみのロンリガイ

窓野 枠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

悲しみのロンリガイ

【NZコード】

N0154D

【作者名】

窓野枠

【あらすじ】

水泳の金メダリストだった田中は、ある日突然、水を寄せ付けない体になつた。水を拒否する体のお陰で、水面を歩けるようになつた。と、主人公に手紙をよこしてきた。それを信じた主人公は東京湾に浮かぶ海萤に行き、田中に会おうとする。

ある日、差出人が書かれていない一通の手紙が届いた。中学まで同級生だった田中君からだと僕にはすぐに分かつた。手紙を読む前に田中君のことを思い出してみた。

*

「より速く泳ぐ」ことは、田中君の目標だった。

小学生のころ、泳ぎだけは誰にも負けなかつた田中君は、誰からも称賛を浴び、オリンピック候補とも、神童とも騒がれた。僕は水泳の時間になると、田中君の泳ぎを憧れのまなざしで見ていた。

中学生になると、田中君と僕は水泳部に入部した。僕はただのスマーダつたけれど、田中君はオリンピックに出て、ついに金メダルまで頂いてしまつた。しばらく騒がれていたけれど、田中君は誰よりも遅い奴になつた。そう、僕よりも泳ぎが遅くなつてしまつた。

ある日、田中君はプールサイドに座つて僕に向かつて悲しそうに言つた。

「水に入つて足や手を必死になつて搔くが、体が前へ進んでくれない。まるで、水を捕らえると言つ感触がないんだ」

なるほど、その場で止まつていたと言つたほうが早かつた。体育の先生も不思議がつた。田中君の体はまるで水に馴染めなくなつていた。長いスランプが田中君を襲つた。やがて田中君は水泳部を止めていった。目標を失つた田中君は家にこもつた。訪ねていつた僕にも会おうとはしなかつた。

3ヶ月後、田中君は自殺を図つた。運良く一命を取り留め、すぐに病院へ入れられた。

すぐに僕は病院を訪ねてはみたけれど、決して会つてはくれなかつた。幾度か訪ねてみたが、そのうち病院へ行くこともなくなつっていた。そして僕は一番の親友を失つた。

*

僕の知っている田中君はここまでだった。僕は中学を卒業して高校へ行つた。それから、大学を卒業し、平凡なサラリーマンをやつている。僕はずっと孤独だつた。田中君のように心を開ける友を見つけることが出来なかつた。一人自分の部屋にいると、いつも田中君のことを思い出していた。

「田中君がいてくれたらなあ」

幾度となくそんなことをつぶやいていた。だから、差出人が書かれていなくたつて、すぐに手紙が田中君からのものだと分かつた。僕は封筒を破り手紙を出した。

*

「こんにちは。元氣かい？ 今、僕は、ちょっと落ちこんでもるんだ。久しぶりだね。

会つて話せるといいのだけど、今の状況じゃ、会えないんだ。その理由を話そうと思う。とても長くなる。いつものよつて、きみは静かに聞いてくれるよね。

何処から話せばいいのだろう。取り敢えず、僕たちが会えなくなつた、中学3年生あたりから書こう。

高校一年の夏、僕は近所の区営プールへ久しぶりに泳ぎに行つた。水に漬かっていた僕は、突然水中から弾き飛ばされ、水面に転がつた。水につかっていたはずの僕の体は、ブヨブヨした水の感触を感じていた。指の先を水面に押し当てるが、まるでビニールの幕がかかつたように水の中に指を入れることすら出来なかつた。僕の体が、水を完全に拒否していた。

それからというもの、僕はプールへ歩きに行くよつになつた。プールサイドに座つた僕の前をピンクのゴーグルを着けた女の子が、水飛沫を上げて横切つていつた。僕は条件反射のように女の子の後を追つていた。

「ねえ、きみつて、魚座だろ？」「

追いついた女の子の横でほふく全身しながら、声を掛けていた。

すると、すぐ側の足元で

「あんた、ここは泳ぐとこよ……」

僕は声のするほうを向いた。中年の女性が、僕のすぐ側で、蔑むような視線を浴びせていた。

「そこの男性！水の上を歩いてるあなた。泳いでいる人の頭を踏むと危険ですから、すぐにプールの外へ出てください！」

プールサイドから褐色に日焼けした大学生らしい監視員が、僕にメガホンを向けて怒鳴っていた。僕は水の上に呆然と立ちすくんでいた。すると、監視員は間髪を入れず言つた。

「ねえ、きみ、早く出たまえ。歩くなラプールの外で歩きたまえ、外で」

「そうだ。プールで歩くくらいなら、外で歩けばいい」

頭の禿げた五十歳くらいの親父さんが、真っ赤な顔を、半分だけ水から出して、足元のほうから僕を迷惑そうに見上げていた。

「す、すみません。すぐ出ますから」

気の小さい僕は、条件反射のように謝つていた。水の上をゆっくり歩いてプールサイドへ上がった。みんな僕の優れた能力に嫉妬しているんだ、と僕は思つた。

「ウソー。ホント。まじー。キヤー！」

廻りで騒ぐ黄色い声が聞こえた。僕は平然を装いながらプールサイドに上がり、おもむろに椅子に腰掛け煙草をくわえた。そう、僕はこのころ不良の高校生だった。金メダリストと言う頂点から泳げない取り柄のない奴に転落したら、人間なんて、なかなか這い上がれないものさ。煙草はアウトローらしくていいね。

「プールで歩いてもいいじゃないか。水の上は軟らかくて、冷たくて気持ちがいいんだ。お前らにはこの気持ちが分からぬんだろう」独り言をいいながら煙草に火を付けようとするが、吸いなれないせいか、手が滑つて煙草を落としてしまつた。やっぱり高校生は煙草を吸つてはいけない。慌てて転がつた煙草を拾おうとしたら、誰かの足が煙草の側にあつた。顔を上げると、いつのまにか、ハイレ

グ姿の五、六人の娘たちが、僕を取り囲んでいた。

「ねえ。一人で歩きに来ているの？」

とびきりの胸と尻が飛び出したナイスバディの女が、僕の顔をじつと見つめていた。僕は、女の白い右胸にできたほくろを見ながら、言つた。

「ぼ、僕のことかい。水の上をちょっと歩きに来ているだけさ。もちろん一人きり。僕みたいな奴は特別扱いでね。つねに寂しいものさ。そう、いつだつてロンリイガイさ」

「キャー。やつぱり。歩いてたんだあ。かつわいいー」

水さえあれば、どこででも女が集まり騒ぐ。そして、周りの男は嫉妬する。今のところこの能力を社会に役立てようなんて、僕はまるで考えていない。とにかく目立つてもることに生きがいがある。でも、この能力の生かす道が何もなかつたら、それはそれで惨めだ、とも思うさ。君もそう思うだろう。

君も知つてゐるだらうけど、ぼくの母は心配性なんだ。こんな体になつてすごく心配している。僕は別に不便を感じていなければ、母のすすめで仕方なく大学病院を受診した。僕は受付から取り敢えず内科を受診させられ、それからいろいろな所を回つて精神科に行き着いた。

大学病院のお偉い先生によると、速く泳ぎたい、目立ちたいという強い願望が精神を変えたという。どう精神が変わつたか、すぐに分析できないらしいが。世の中分からぬ事だらけだ。

「命に危険はないから安心していいよ」

特殊能力の診断だつたはずなのに、どうして精神科なのかわからなかつた。精神科の医者は、にこにこして楽しむよつな顔をして僕を見ていた。

「諦めず、根気よく治療していく。そうすれば、水の中にも入れるから」

高額な診察料を払つたのにこれだけだつた。治療していくこと、医者は言つていたが、治療しなければならない理由が僕には分から

なかつた。別に水の上を歩けても困らないのだからね。

プールもいいが、やはり海が最高だつた。広がる大海原の水面をさつそうと走る姿はさすがに注目の一的だつた。褐色のサーファーも真つ青だつた。

僕はこの超能力のお陰で大海原をジョギングするのが好きになつた。しかし、東京湾をジョギングしたのは大きな間違いだつた。

タンカーやらコンテナ船、釣り船、屋形船、ヨット、軍艦などが所狭しと往来している。風の強い日はとくに危険だつた。高い波頭で遠くが見渡せないとついていたら、案の定小さな屋形船が波間に陰から突然現れて、僕は呆気なく轢かれてしまつた。

「い、今、人を跳ねなかつたかあ」

「何、寝ぼけとるんだあ。ここは海の上だぞ。ばっかもの、しつかり目ん玉開けてろ！」

そんな会話が聞こえたかと思つたら、船は遠ざかつていつてしまつた。僕は死んで超能力が無くなつたら、僕の体は昔のようにまた水の中へ入れるのだろうか。水面の上で仰向けに横たわりながら思つた。僕はちょっと懐かしい気持ちがして嬉しくなつた。水の中に入れるよになつたら、また、君と一緒に泳げたらしいなあ、と思つた。

何時間経つたろう。目を覚ました僕は、深い海底へと吸い込まれていくのが分かつた。遙か上のほうから淡い光りが射している。水中なのに苦しさはまつたくなつた。

「まだ生きている。おまけに水の中でも呼吸ができる」

僕は地上に出ようと、もがくように水を手足で搔いた。やつと水面に出ようとした途端、何かに頭を思い切りぶつけた。両手で触ると、それはとても軟らかい。しばらくして、空気の塊と分かつた。

どうやら今度は水から出られない体になつてしまつたようだ。こんなことになつて、僕は何よりも話し相手がいなくなつてしまつて

悲しいんだ。本当のロンリイガイになってしまった。毎日、魚が食事を持つて来たりするだけ。ときどき、魚とも話すけど、僕には何の話をしてるのか、よく理解できない。だから、こんな手紙を書いている。僕には君だけが頼りだ。

よかつたら、顔だけでも見せに来てくれないだろつか。待ってるよ。

僕の友へ

田中

*

田中君の手紙はそこで終わっていた。今、田中君はまだ病院にいるかもしない。いや、田中君の手紙にあるように、東京湾にいるかもしねれない。

日曜日、僕は東京湾に浮かぶ人工島「海螢」^(うみほたる)に行つてみた。冬だと言つのに、暖かな日が体を包んでいた。心の底から田中君に会つてみたくなつた。ここなら、田中君がいそうな気がした。田中君は目立ちたがりやだつたから、有名な海螢が好きだと思つた。田中君のことなら何だつて分かる。久しぶりに田中君の顔も見たかつた。

海螢の海岸に立つた。肌にあたる風が冷たく、遠くにたくさんの船が浮かんで、ゆっくり動いていた。

僕は海の中を覗き込んだ。僕の顔が映つていた。しばらく見つめていると、田中君の顔が海の中からのぞいていた。僕がにっこり笑うと、田中君も笑つた。

「やあ、」

僕が片手を挙げて挨拶すると、田中君も同じ動作をした。

「来てくれたんだね」

田中君が涙を流しながらそう言つた気がした。僕も田中君の気持ちを思つと、涙が出てきて泣いてしまつた。

「手紙見たよ」

僕はむねポケットにしまつた手紙の辺りを手で押さえた。田中君

はこつくつとうなずいた。手紙の入ったジャケットを脱ぎ、履いてきた靴を片方ずつ脱いだ。靴の上にジャケットをきちんとたたんでおくと、冷たそうな凍えた水を見つめた。

「海の中は寒くないのかい？」

田中君は僕の問い掛けにただ笑っていた。昔のように暖かな笑いだった。僕は静かに海の中へつま先をつけてみる。押し寄せた波がソックスを濡らし、足首まで濡らした。水は冷たくなかつた。それどころか、どこか暖かさを感じた。田中君が待つてくれるからだろう。

「また一緒に泳げるね。中学のころ以来だよね」

僕はゆっくり歩を進めていった。胸まで海水がつかつた。ときどき押し寄せる波で海水が口の中へ入つた。少し咳き込んだ。海の味はやはり塩辛かつた。僕は押し寄せる水の中へ徐々に進んでいった。

「田中君、いるのかい？」

声を出した次の瞬間、大きな波が来て、僕の足はすぐわれ、水中に飲み込まれた。

「ああ、さつきからずっとときみのそばにいたよ」

耳元にやつと暖かな言葉が返ってきた。たくさんの海水を飲み苦しくてしうがなかつたが、これも儀式の一つなのだ。遠のく意識を振り絞り、僕は次の儀式のために海流に身を任せた。僕の体はどんどん海の底に沈んでいった。もう、苦しくはなかつた。

(ア)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0154d/>

悲しみのロンリガイ

2010年10月16日00時39分発行